慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	太平洋戦争期の奥野信太郎 : 第一回・第二回大東亜文学者大会との関わりを中心に
Sub Title	Okuno Shintarō in the Pacific War period : focusing on his involvement in the first and second Greater East Asia Writers' Conferences
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2026
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.130, (2026. 6) ,p.79 (114)- 97 (96)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01300001-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

太平洋戦争期の奥野信太郎
――第一回・第二回大東亜文学者大会との関わりを中心に

杉野　元子

はじめに

慶應義塾大学文学部支那文学科（現・中国文学専攻）の創設者であり、随筆家としても知られる奥野信太郎（1899－1968）について、筆者は2018年に拙稿「奥野信太郎の北京留学体験」（『芸文研究』第114号）を発表し、1936年7月から1938年4月までの北京留学について考察した。奥野自撰の年譜（1958年）には、慶大予科在職中の1936年、「たまたま外務省在華特別研究員の選にあたった」ことが留学の契機であると記されており[1]、藤田祐賢編纂の年譜（1971年）もこれを踏襲している[2]。しかし拙稿では、外務省外交史料館の史料に基づき、奥野の留学身分が1年目は「在支第三種補給生」、2年目は「在支特別研究員」であったことを実証した。また、これら選定をめぐる経緯を考察したほか、留学2年目の中国東北部への研究旅行についてもその足跡を詳細に辿った。

本稿では時期を北京留学期から太平洋戦争期に移し、日米開戦を経て戦火が拡大するなか、奥野が戦時体制といかに向き合い、いかなる言論活動を展開したのかという問題意識に基づき考察を行う。藤田祐賢編纂の年譜は、奥野自撰の年譜に補筆修正を加えたものであり、現時点で最も詳細な年譜である。同年譜において、北京留学から帰国した1938年から、北京滞在中に終戦を迎え帰国する1946年に至るまでの時期については、次のように記されている。

> 昭和十三年（一九三八）　三十九歳
> 四月、薫夫人と帰国、恩師戸川秋骨の媒酌によって結婚。慶大予科教授に任ぜられ、同文学部講師を兼任した（支那文学担当、隔年出講）。十一月末、

世田谷区代田二丁目八五〇番地（現在の代田四ノ一三ノ一七）に移転。年末、次男燕児出生。

昭和十五年（一九四〇）　四十一歳

夏休みを北京で過した。

昭和十七年（一九四二）　四十三歳

四月より慶大文学部兼任講師で連年出講となった。夏休みに北京に行き、慶大支那文学専攻二年の芳賀日出男（現在民俗写真家。当時北京に居住。）と共に中国演劇史の実証的調査（城内と前門附近の一部）に専念した。

昭和十八年（一九四三）　四十四歳

一月より慶應義塾語学研究所所員（第二部）となった。

昭和十九年（一九四四）　四十五歳

七月、檀結婚。十月、北京輔仁大学に客員教授として招聘され、一年間日本近代文学史・日中文化交流史・日本漢文学史を講義することになった。かたわら仁井田陞博士と外城の廟を探り、中国演劇の実証的調査を継続した。また、同大学の教授で戯曲小説の研究では第一人者の孫楷第と親交を結び、閑談のうちから学問上大いに得るところがあった。当時の住居は什刹後海の水辺にあり、孫氏から「池上草堂」の名を得た。

昭和二十年（一九四五）　四十六歳

終戦のため帰国できず、引続き輔仁大学に職を奉じた。

昭和二十一年（一九四六）　四十七歳

四月帰国。五月、慶大文学部予科教授に復職。慶應義塾外国語学校講師、文学部講師を兼担した。[3]

第2節で詳述するように、当該年譜の1940年および1942年の記載内容には、事実誤認が認められる。加えて、第一回から第三回に至る大東亜文学者大会への関与など、日本文学報国会における奥野の活動実績も反映されていない。したがって本稿では、『日本学芸新聞』をはじめとする当時の諸資料を精査し、藤田編年譜の誤りを正し、欠落を補完することで、太平洋戦争期における奥野の足跡を再構築することを目指す[4]。ただし、紙幅の関係から本稿では第二回大東亜文学者大会までの時期を対象とし、以降の時期については別稿に譲りたい。

1、第一回大東亜文学者大会

日本文学報国会（以下、「文報」と略記）は、1942年5月26日、内閣情報局の指導下で結成された文学者団体である。同会は、小説、劇文学、評論随筆、詩、短歌、俳句、国文学、外国文学の8部会から成り（1943年4月には漢詩・漢文部会が新設され、9部会体制へ移行）、約3000人の文学者を組織して国策宣伝および戦争協力を推進した。奥野は外国文学部会に所属していた。文報の会員名簿（1943年3月10日現在）によれば、外国文学部会には381名が所属し、部会長に茅野簫々、理事に辰野隆、幹事長に中野好夫が就任、常任幹事には中村光夫ら6名、幹事には奥野を含む15名が選出されている[5]。

外国文学部会は、1942年7月10日に第一回幹事会を開催して以降、月一回の頻度で会合を重ねた。幹事会には奥野のほか、中国文学の専門家として増田渉も名を連ねていたが、他の顔ぶれは、独文、英文、仏文、伊文、露文、印文、古典ギリシア文学の専門家たちであった。幹事長の中野好夫は、外国文学部会について、「他部会に見られない寄合世帯」で、「親睦といふことも、わが部会にとつては他部会のそれとは比較にならない重要な意味がある」が、「幸に幹事役員会の間では、諸氏の心からの協力と犠牲とによつて予期以上の親和の実があがつてゐる」と記している[6]。また、評論随筆部会の幹事と外国文学部会の常任幹事を兼任していた中村光夫は、後年、評論随筆部会よりも外国文学部会の幹事会に好んで出席した理由について、次のように回想している。

> 評論随筆部会では、どうしても国民の戦意昂揚とか、日本主義思想の宣揚などということが議題になりがちで、「愛国百人一首」を作ることになったりして、下手に西洋文学のことなど話題にできない雰囲気だったのに反して、外国文学部会の方は、みなジャーナリズムから締めだされているせいか、反時代的な気分の人たちが大部分で、戦局についての無遠慮な噂も出て、なかなか面白かったからです。
>
> 「この部会は何も仕事は出来ない。何かしようとすれば、かえってみなの迷惑になるから自分は何もしない方針だ。」と中野好夫氏が言っていましたが、そのせいか幹事会は、新聞には出ないような噂話に終始し、月々開かれるのが待ち遠しいくらいでした。[7]

文報の各部会は国策への全面的な協力が求められていたが、「寄合世帯」の外国文学部会は消極的な協力姿勢にとどまり、幹事会も時局に関する放談の場と化していた。好奇心旺盛で、肩肘張らない雑談を得意とした奥野も、こうした部会の雰囲気になじんでいたと思われる。しかし、大東亜文学者大会の開催が決まったことで転機が訪れる。中国留学の経験があり、『随筆北京』の著者としても知られる奥野に白羽の矢が立ったのである。準備段階から協力を要請された奥野は、それに応える形で大会運営に深く関与していくこととなる。

1942年8月1日付『日本学芸新聞』は、文報が発表した文化建設のための八大企画について報じている。その筆頭には「皇国文化宣揚大東亜文学者会議」が掲げられ、同会議の準備委員として、三浦逸雄、春山行夫、川端康成、奥野信太郎、河盛好蔵、林房雄、飯島正、一戸務、吉屋信子、細田民樹、中山省三郎、木村毅、草野心平、高橋広江、金子光晴、張赫宙の名が記された[8]。この準備委員会における議論の様子について、金子光晴は後年、次のような興味深いエピソードを書き残している。

> 文学報国会では、大東亜共栄圏内の文士たちを日本に招く相談でいそがしかった。僕の名も、報国会の名簿のすみに入っていたので、是非出席してくれといってきた。僕が東南アジアを戦前に歩き廻ったことを知っていたから、なにかの知慧を借りるつもりだったのだろう。十人位が出席していた。久米正雄をはじめ、中山省三郎や細田民樹がいたのを記憶する。共栄圏の文士達を引きつれてまず、宮城遥拝をさせ、八紘一宇の思想をたたきこむためパンフレットをよませるという案が出た。八紘一宇は、彼らにとってなんの意味もないし、到底理解できないだろうから引きさげた方がいいと僕が意見を出すと、それは何故だと中山がつめよった。ただ、名前を忘れたが一人の中国研究学者が、僕の意見に賛成しただけで、妙に気まずい空気になって、僕は途中から退散した。[9]

準備委員16名のうち「中国研究学者」に該当するのは、奥野と一戸務の2名である。櫻本富雄はこの金子の回想に登場する「中国研究学者」がどちらであるのか、気にかけていた。1968年1月15日、葛飾公会堂での成人式で講演を行う奥野

と講師控室で同席する機会を得た櫻本は、「その中国研究学者は先生ですか、一戸務ですか」と質したが、奥野の返答は記憶にないというものであった[10]。奇しくも奥野はこの日の夜、帰宅途中のタクシー内で体調を崩し、搬送先の病院で急逝する。

第一回準備委員会は1942年7月21日、文報事務局会議室で開催され、招待者の範囲、日程、視察旅行などについて協議が行われた[11]。金子光晴が記したエピソードは、この初回の会合時の出来事と思われる。次いで、第二回準備委員会は8月8日、「陸・海・外・拓・興亜院対満事務局、情報局等の関係官庁と文報・朝日新聞」との連絡会議という形で実施された[12]。1942年9月1日付『日本学芸新聞』は、大東亜文学者大会の大会議員として「満洲国、中華民国、仏印、インドネシア、ビルマ、フイリツピン等六ヶ国の代表的文学者約三十名」を招待する計画を報じ、中国側の招待候補者9名の氏名も列挙している[13]。しかし、10月1日付同紙は、「後援朝日新聞社に於て各地支局を通じ現地軍、興亜院その他現地当局と協議銓衡」した結果、招待状を満洲国9名、中華民国13名に発送したと報じており、対象国は当初の6か国から2か国へと大幅に縮小した[14]。そして最終的には、満洲国6名、中国12名、蒙疆3名が大会議員として確定する[15]。以下、中国側に限定し、9月時点の第一次候補者、10月時点の第二次候補者、および最終決定した大会議員の氏名を提示する。

第一次候補者9名
（華北）周作人、銭稲孫、沈啓无、尤炳圻、兪平伯、（華中）傅東華、高明、張資平、陶晶孫
第二次候補者13名
（華北）周作人、銭稲孫、沈啓无、尤炳圻、兪平伯、徐祖正、（華中）周化人、許錫慶、丁雨林、潘序祖、柳雨生、関露、草野心平
大会議員12名
（華北）銭稲孫、沈啓无、尤炳圻、張我軍、（華中）周化人、許錫慶、丁雨林、潘序祖、柳雨生、周毓英、龔持平、草野心平

1942年9月3日付『読売報知』夕刊は、「日本文学報国会主催、情報局、陸海軍報道部後援の「第一回大東亜文学者会議」は【満洲国】川端康成【中国】奥野信

太郎、増田渉、一戸渉【南方】木村毅、中山省三郎氏ら同会議準備委員会の手で人選その他具体案を作成中のところ、このほど成案を得た」と報じている[16]。前述の1942年8月1日付『日本学芸新聞』が報じた準備委員16名の中に増田渉の名前がなかったことから、増田は後で加わったものと推察される。増田は1931年に上海に10か月滞在し、魯迅から魯迅作品に関する個人指導を受けた経歴を持ち、1935年には魯迅『支那小説史』（原題『中国小説史略』、サイレン社）を翻訳出版している。一方、一戸務は1929年に北京を訪れて周作人と面識を得て以来、その随筆を愛読し、1940年には周作人『苦茶随筆』（名取書店）を翻訳出版した。こうした各人の背景に鑑みれば、第一次招待候補者の選定において、華中は増田、華北は一戸と奥野が中心的な役割を担ったと考えられる。その後、文報は興亜院などの現地当局と「協議銓衡」を重ねて第二次候補者を決定し、招待状を発送した。しかし、周作人をはじめとする数名が辞退したため再調整を余儀なくされ、最終的な大会議員の顔ぶれは、当初の第一次候補者とは大きく異なるものとなった。中国側の第一次候補者9名のうち、実際に大会議員に選出されたのは、華北の3名だけである。1942年10月30日付『読売報知』朝刊の特集記事「近づく大東亜文学者大会／集ふ満洲・中華の作家たち」において、華北代表の大会議員4名の紹介を奥野が執筆している事実は、彼が華北側の選考に深く関与していたことを示す証左と言えよう。なお、華中代表7名の紹介は、自らも華中代表に選出された草野心平が担当した。草野は準備委員ではあったが、当時は汪兆銘政権（南京国民政府）の宣伝部顧問を務め、日本に不在であったことから、第二次候補者の選定段階から関与していたものと思われる。

奥野は大会準備委員として中国側代表の選考にあたる傍ら、中国文学研究会の中核を担う竹内好のもとへ自ら足を運び、大会への協力を要請した。竹内好はその時のことを次のように記している。

> 先日、日本文学報国会から、会長の名で、大東亜文学者大会を開催するについて援助を請ふ旨の印刷した書状が中国文学研究会あてに届いた。その数日後、僕は勤先の研究所の電話で、日本文学報国会の者だといふ人から、その大会で、ある仕事を引受けてくれと申込まれた。依頼の仕方も唐突であつたが、そのこととは関係なしに、多忙の故をもつて辞退した。その日の夜、報国会の幹事の一人である奥野信太郎氏の来訪を受け、はじめて詳しい事情を

聴くことを得、懇ろな情理を尽した翻意の勧奨があつた。僕は情において忍び難かつたが、やはりお断りした。［中略］支那の文学者を招待するのに、日本における唯一の支那文学の団体である中国文学研究会が加はらぬのはをかしいから、何とか出てくれといふのが奥野氏の意見であつた。中国文学研究会に対する正しい評価と厚い情誼を「随筆北京」の著者からきいて僕は心やや動いた。情において忍びぬと云つたのはこの意味である。［中略］僕は、少くとも公的には、今度の会合が、他の面は知らず、日支の面だけでは、日本文学の代表と支那文学の代表との会同であることを、日本文学の栄誉のために、また支那文学の栄誉のために、承服しないのである。［中略］弄ばれる支那文学が痛ましい。昭和十七年某月某日某の会合があつて、日本文学報国会が主催したが、中国文学研究会は与らなかつたといふことを、その与らぬことが、現在においては、最もよい協力の方法であることを、百年後の日本文学のために、歴史に書き残して置きたいのである。[17]

当時、老舎、巴金、茅盾、沈従文といった実力のある大物文学者たちは相次いで日本軍支配地域を脱出していた。残留した者の中には著名な文学者がほとんどいないという状況下で、「日本文学の代表と支那文学の代表との会同」を標榜することの無理は、火を見るよりも明らかであった。事実、中国代表として来日した12名の中国人のうち、中国現代文学史にその名を留めるのは、銭稲孫、張我軍、潘序祖ら数名に過ぎない。文報側は中国から代表団を迎えるにあたり、国内唯一の中国文学専門家の団体である中国文学研究会が表に立って歓迎の意を示すべきであり、その代表として竹内の大会参加が不可欠であると考えたのであろう。奥野はこうした組織の意向を携え、竹内に対して「情理を尽した」説得を試みた。しかし、竹内はこの文学者大会の本質を、中国文学を「弄ぶ」まやかしの文化交流であると断じ、関与することを拒絶したのである。

第一回大東亜文学者大会（以下、「第一回大会」と略記）は、1942年11月3日から10日にかけて東京および大阪で開催された。開会式は11月3日に帝国劇場で、会議は4日・5日に大東亜会館で、閉会式は10日に大阪の中央公会堂で行われた。このほかに、付随的プログラムとして各種見学や座談会などが組み込まれた。会議には、満洲国・蒙疆・中国からの大会議員21名に加え、日本側からは大会議員57名（台湾4名、朝鮮5名を含む）と大会参与136名が出席した。奥野

は名簿上、大会議員・大会参与のいずれにも名を連ねていない。しかし、一戸務も同様に名を連ねていないものの、彼は「今回の文学者会議の委員として臨席」したと記している[18]。この「委員」が何を指すのかを確認するために関連資料を調査したところ、中国語文献『大東亜文学者大会』に該当する記載が見出された。同書「第一届大東亜文学者会議概況」の「参加人員」の項には、議長、副議長、司会、大会議員77名の氏名に続き、「委員長 久米正雄」および「委員」として一戸や奥野を含む13名の氏名が記載されている[19]。このことから、「委員」が大会委員を指すことが裏付けられる。さらに、後述する柳雨生の随筆における言及も併せて判断すれば、奥野も一戸と同様に大会委員として会議に参加していたことは確実であると言えよう。

大会期間中の奥野の動静については、日本語文献からはその姿を伝える記述は見当たらない。しかし、華中代表の柳雨生が訪日時の想い出を綴った随筆「異国心影録」および「女画録」において、奥野に関する言及がなされている。「異国心影録」は、親しく接した日本人の一人として奥野の名前が挙げられており、11月4日の会議終了後、奥野が華中代表の柳雨生、龔持平、潘序祖の3名を神保町の古本屋街や龔持平の母校である早稲田大学へ案内し、さらには喫茶店で接待したことが記されている[20]。また「女画録」の「五、温情と友情」では、日本で親交を結んだ友人として奥野と中山省三郎を紹介している。そこには柳雨生の捉えた奥野像が活写されているため、やや長文となるが以下に引用したい。

> 一人は奥野信太郎先生である。四十過ぎのたいへん温厚な学者で、日本の慶応大学の教授であった。漢文を教えており、かなり流暢な北京語を話すので、私たちの間に言葉の壁はなかった。わずか十数日の短い交流ではあったが、互いに気心の知れた友人となったのである。彼はかつて北京を訪れたことがあり、墨蝶林菜館の西洋料理や、小翠花が長安大戯院で演じた「挑簾裁衣」が忘れられないという。「挑簾裁衣」は『水滸伝』の物語である。彼は『水滸伝』だけでなく『紅楼夢』も愛読し、さらには『西遊記』の五十数回分を日本語に翻訳していた。中国文学全体の成果についても、中国文化全体の変遷と発展についても、彼は常に強い興趣を抱きながら味わうという姿勢でいる。中国文化を鑑賞することができるだけでなく、中国人に対して真の共感を寄せることもできるのである。もし現代の中国に、中国に寄り添お

うとする彼のような熱意をもって、日本の人々を理解し共感しようとする学者や思想家が数多くいるならば、中日両国の関係の緊密さ、相互扶助の深まり、唇歯のごとく互いに支えあう関係は、きっと現在の状況よりも何倍も強まるに違いないと思う。

奥野先生は、誰よりも進んで私たちの面倒を見て、手助けをしてくださった。文学者大会の後の休憩時間に、彼は私たちに付き添って木炭自動車に乗り、古書店の集まる街を散策した。絵具を買い求める者もいれば、本を購う者もおり、また書店の中で目移りして立ち去りがたく思っている者もいた。奥野先生は皆のために値段を聞いたり、どの本がどこで売られているのか友人に代わって尋ねたりと、大忙しだった。その後、さらに私たちといっしょに早稲田大学界隈を見学し、あたりが夕暮れに包まれるころになってようやく、私たちを連れて急いで戻り、講演会に出席した。

ある書店で、私は「文部省美術展覧会出品作品」のカラー絵葉書がたくさん並んでいるのを目にし、数枚を選んで購入した。それらは今も大切に保存している。ただ、その中の一枚だけは奥野先生から贈られたもので、物思いにふける少女が描かれていた。実はそれは奥野先生のお嬢さんで、明るく美しい姿が、名だたる画家の妙筆によって、いっそうしとやかで可愛らしく描き出されていた。奥野先生は、この原画は実によく描けているのだと、何度も私に語った。後日、私が美術展を見に行ったとき、たしかにその優美な原作を目にすることができた。[21]

柳雨生の随筆によって、奥野が11月4日の午後、会議終了から夜の講演会までの合間を縫い、華中代表3名の案内役を買って出たことが判明した。一行は神保町、早稲田大学、そして喫茶店の3か所を巡っている。第一回大会では、大会用語が日本語に統一されていた。日本語以外の発言には通訳が付されたが、日本語による発言に対しては他言語への通訳がなされなかったのである。柳雨生、潘序祖ら日本語を解さない参加者は、表向きは友好的な態度を保っていたものの、内心では日本側の傲慢な運営に憤慨し、苦々しい思いで会議の時間を過ごしていたと推察される。それゆえ柳雨生にとって、会議後に中国語を流暢に操り、中国文化に深い関心を寄せる奥野とよもやま話を交わしながら街を歩いたことは、何よりの息抜きであり、心休まる愉快なひとときであったに違いない。奥野の「温情

と友情」は忘れられぬ思い出として、柳雨生の心に刻まれたのである。なお、この日のことは、翌11月5日付『東京日日新聞』朝刊に、奥野の名こそ出ていないが、「三人の買物／古本屋街漫歩」と題した記事で伝えられている。また、柳雨生は奥野の長女をモデルとする絵画の実物を鑑賞したと書いているが、大会プログラムを確認すると、11月8日午前に文部省美術展覧会の参観が組み込まれている[22]。

本節では、1942年5月26日に内閣情報局の指導下で文報が結成されてから、同年11月3日から10日にかけて文報主催の第一回大会が開催されるまでの期間を対象として、奥野が文報という国策文化団体とどのような関わりを持ったのか考察を行った。奥野は文報外国文学部会幹事、および第一回大会の準備委員・大会委員を務めており、文報の事業に対して積極的に協力する姿勢を示していた。次節では、第一回大会の終了後から、第二回大東亜文学者大会（以下、「第二回大会」と略記）開催に至るまでの時期における奥野の足跡を辿る。

2、第二回大東亜文学者大会

第一回大会終了後から第二回大会開催に至るまでの時期に、奥野が関与した文報関連の事業は、文学報国大会、南方共栄圏向け日本文学史の編纂、海外向け日本文学作品の銓衡、そして第二回大会である。

文学報国大会は1943年4月8日、「今や大東亜戦争決戦期に当り全日本文学者の総力を結集し、皇国文学理念を宣揚以て一路米英撃滅をめざし世界文化を指導せんとす」という趣旨の下、軍人会館で開催された[23]。文報は大会前の3月、会議主題「英米撃滅と文学者の実践」について発言を希望する者は原稿紙１枚程度の要旨を事前に提出するようにと会員に呼び掛けた[24]。その結果、発言希望者は78名に及び、奥野も「大東亜の文学交流について」と題した要旨を提出したが、時間の都合により発言者が23名に絞られたため、奥野が発言の機会を得ることはなかった[25]。

南方共栄圏向け日本文学史編纂は、国文学部会と外国文学部会の共同事業である。1943年4月15日には、この編纂事業の一環として「南方事情を聴く会」が催され、奥野も出席した[26]。奥野は編纂委員の一人として出席したものと推察される。編纂作業は1944年初頭に終了し、外国文学部会は日本語原文から英語およ

び中国語への翻訳作業に着手したが[27]、英訳版・中訳版ともに出版された形跡がないことから、戦況の悪化と紙不足の深刻化のなかで、計画は頓挫した可能性が高い。なお、原文は1944年12月に『標準日本文学史（日本語版）』の書名で、大東亜出版より刊行された。

1943年5月、文報内に「海外向日本文学銓衡委員会」が設置された。これは、国際文化振興会が明治以降の文学作品の中から、日本の精神と美を伝える作品を選定し、翻訳出版することを企画した際、その選考作業を文報に委嘱したことに基づくものである。同委員会は、審査委員27名が候補作品を絞り込み、選定委員12名が最終決定を下すという体制をとり、奥野は審査委員に名を連ねた[28]。奥野は同年6月9日・10日付『朝日新聞』朝刊に、「海外紹介の意義／共栄圏に贈る日本文学（上）」および「自主的な選択へ／共栄圏に贈る日本文学（下）」を発表した。この中で奥野は、「相手の理解の程度や文化一般の程度を忖度し過ぎて、あれも悪からうこれもいけまいと考慮をめぐらすことは愚の骨頂である」と主張した。その上で、泉鏡花作品を例にとり、翻訳があってしかるべきであるにもかかわらず、「語学的に最も困難」であり、また「現代支那人がすぐ作者の思想そのものに触れやすいものを喜ぶ傾向にある」ことから中国語訳が存在しないという現状を指摘した。同年6月1日付『日本学芸新聞』の記事「海を渡る日本文学／選衡資料続々と集る」には、文報会員から推薦された約70名の作家とその作品が列挙されている。この中に鏡花の幻想的作品「高野聖」と「唄立山心中一曲」が含まれているが、これらは奥野の推薦によるものと推察される。第一回銓衡委員会は6月12日に開催され、同年9月までに計3回開かれた[29]。しかし、それ以降の報道は途絶えており、この企画も戦況の悪化などにより頓挫した可能性が高い。

次に、第二回大会と奥野との関わりについて検討する。第二回大会は、1943年4月の段階では、10月3日から18日までの16日間開催とされていたが[30]、7月に入り、「国内の決戦態勢に歩調を合せるため特に期日を早め、八月二十五日から十日間開く」こととなる[31]。開催時期の大幅繰り上げの背景には、同年2月のガダルカナル島撤退、5月のアッツ島守備隊全滅といった戦局の急激な悪化があったと考えられる。高見順は7月17日の日記に、「十一［ママ］月に行われるはずの大東亜文学者会議第二回が、軍部からの話で急に八月に行われることになった。九、十、十一月になると、そういう会議が許可されないとのこと」と記している[32]。文報は軍部の要請により、開催の繰り上げを余儀なくされ、急ピッ

チで準備を進めることとなった。同日の高見の日記には、「その大会委員を頼まれた、委員会である。委員の顔ぶれは、」との記述に続けて30名の委員名が列挙されており、その中に奥野の名前も確認できる[33]。奥野は第一回大会に続き、第二回大会でも大会委員に選任された。

「大東亜文学者決戦会議」と称された第二回大会は、1943年8月25日に帝国劇場で開会式が行われ、続く26日・27日の両日、大東亜会館にて会議が開催された。会議終了後も、9月6日に至るまで見学や講演会などの諸プログラムが組まれた。大会議員の内訳は、日本98名（台湾4名、朝鮮5名を含む）、満洲5名、中華民国18名、蒙疆5名であった。先に選任された大会委員30名のうち、奥野と増田渉を除く28名がそのまま大会議員に名を連ねている。大会議員の中に増田の名前がない理由は定かではないが、奥野については、開催日程が自身の訪中スケジュールと重複したことが原因であったと考えられる。

ここで奥野が北京留学を終えて帰国した1938年4月から輔仁大学に訪問教授として赴任する1944年10月までの時期の訪中歴について整理する。奥野は自撰年譜において、1940年に「暑中休暇を北京で過す」と記している[34]。また、冒頭で引用した藤田祐賢編纂の年譜には、1940年の訪燕に加え、1942年の夏季休暇にも訪燕し、芳賀日出男とともに中国演劇史の実地調査を行ったとの記述がある。しかし、筆者が調査したところ、実際に奥野が訪燕したのは1940年と1942年ではなく、1941年と1943年であったことが、諸資料の記述から明らかとなった。

奥野は1941年8月30日付『朝日新聞』朝刊に掲載されたコラム「現地の支那語」において、「わたくしは久しぶりでこの夏を北京で過してゐるが、さて二三年前の北京と今日の北京とを比較してみて最も驚嘆に値することの一つとしてこゝにポコペン支那語の普及を挙げることができよう」と述べている。また同年12月発表の随筆「北京の都城精神」でも、「この夏二箇月の滞燕に於てすら、わたくしは昭和十一、十二、十三年当時の北京に比較すると、さういふ意味の北京のよさに著しい変革のあつたことを認めないわけにはゆかなかつた」と記している[35]。もし奥野が1940年と1941年の2年連続で夏季を北京で過ごしていたならば、このような「久しぶり」という感慨や、1936～38年と比較するような記述にはならないはずである。したがって、奥野が留学帰国後に初めて北京を再訪したのは1940年ではなく1941年であると断定できる。なお、1941年夏の再訪時、奥野は方紀生の招待を受け、翌年の第一回大会に参加することとなる沈啓无、尤炳圻と

ともに墨蝶林菜館にてロシア料理の饗応を受けた。食後には４人で新々戯院に赴き、小翠花が演じる「烏龍院」を鑑賞した[36]。先に引用した柳雨生の随筆にある「彼はかつて北京を訪れたことがあり、墨蝶林菜館の西洋料理や、小翠花が長安大戯院で演じた「挑簾裁衣」が忘れられないという」という一節は、劇場名と演目に相違はあるものの、奥野が1941年夏の訪燕について語ったことを回想しながら執筆されたものと推察される。

奥野が1941年の次に訪燕したのは、1943年である。1943年10月6日付『朝日新聞』朝刊は、「さる七月から九月二十日まで北京に滞在、支那演劇方面の研究を進めてゐた」奥野が、滞在中の8月に古本市で、中国国内で絶無とされていた円明園の記録文献を発見・入手したことを報じている[37]。また、芳賀日出男は追悼文の中で、「昭和十八年の夏休みに奥野先生は北京に旅行された。当時私の自宅は北京にあり、私は先生より数日おくれて帰省した。［中略］それから二週間、私はカメラをかついで奥野先生のおともをして北京市内をめぐることになつた。目的は明朝から清朝にかけての演劇のあとを実地調査し、写真で記録することである」と回想している[38]。以上の資料から、藤田祐賢作成の年譜において1942年とされている中国演劇調査は、実際には1943年に行われたものであると断定できる。

この1943年の夏季調査旅行は、かなり早い時期から計画されていた可能性が高い。同年4月13日付『朝日新聞』夕刊の記事「「芸能学会」が誕生／日本固有の芸能の確立が目標」は、同日に芸能学会（会長・折口信夫、奥野は常任委員）の発会式が執り行われることを報じている。この記事には、学会の事業として「奥野信太郎氏の支那芸能調査派遣をはじめ大東亜各国の芸能調査大成を期してゐる」という言及があり、奥野自身の「共栄圏諸民族の芸能と日本芸能とのつながりを究めることも明日の日本文化に寄与する点が多い」という談話も掲載されている。以上のことから、4月の時点ですでに奥野が夏季休暇中に中国へ派遣されることは内定しており、奥野もその準備を進めていたと考えられる。したがって、急遽8月への繰り上げ開催が決まった第二回大会については、大会議員となることを辞退し、当初の予定どおり中国へ向かったのではないかと推察される。

奥野は第二回大会には出席しなかったが、1943年8月11日付『朝日新聞』朝刊の学芸欄に「真の文化提携へ／大東亜文学者大会に望む」と題する一文を寄せた。この文章の前半では、奥野は第一回大会以降の大きな国際情勢の変化とし

て、「参戦後の中華民国が租界の返還を受け、条約の改訂を得て」近代国家として成長しつつあることを挙げ、中国は「日本の好意によつて国際的地位の躍進を続けつゝある」と記した。また第一回大会については、「もちろん最初のこととて不備な点も随分目にはついたが、その最大効果なるものは敵米英にたいして与へた衝動の大きかつたことである」と評価した。このように前半は、日本が政治面・文化面の双方において大きな成果を挙げているとする体制側言説に寄り添った文面となっているが、後半では、日中両国の実りある文化提携に向けた提言を行っている。

日華両国の文化提携についてはしばしば多くの有識者によつて数限りなく論じられてきたが、これが一つの組織力をもつまでに進展してこない以上、どうしても議論倒れになる傾きがあつた。大東亜文学者大会そのものはこの意味に即していへば文化提携への組織力を構成するものであり、また是非ともさうした内容をもつたものでなければならない。

それには大会で議決された諸事項の可及的短時間における具現化といふことが必要である。そのためには相互に専門委員を常置して研究してゆくことも大切であらうし、また相互の委員会の間を斡旋する適当な連絡員の特派も必要となつてくるであらう。

殊に難事中の難事ともいふべきことは、民国の文学者たちが日本の文学者たちから一体如何なるものを最も多く期待してゐるであらうかといふことを知るにある。

伝へ聞くところによれば、作家巴金ならびに郁達夫等は最近和平陣営に投じきたつた由[39]、かういふ機運を今後ますます醸成せしめてゆく上からも、民国文壇人が日本との連繋といふ一点において何を考へ何を欲してゐるかといふことを的確に知りたい。

隔意なき意見の交換といふことは言ふにやすくして行ふに難い。彼等の要求とするころ〔ママ〕を知るに最も賢明な方法は、およそ如何なる様式が採られなければならないであらうか。日本側の指導性確立のためには万難を排してまづこの一事にたいして周到な準備を必要とするのである。

奥野は「大会で議決された諸事項の可及的短時間における具現化」を訴えてい

るが、これは第一回大会後、決議を受けて複数のプロジェクトが構想・着手されたものの、相当数が計画倒れ、または不完全な実施に終わった状況を問題視したものと考えられる。さらに、日中文化提携の実現には、中国の文学者たちが日本側に何を求めているのか、その真意を汲み取ることの重要性も強調している。このように奥野は後半において、大東亜文学者大会が内包する問題点を鋭くえぐり、真の文化提携に向けた提言を行っている。しかし、奥野が前提としているのは対等な文化提携ではなく、日本側が指導的立場に立つ文化提携であり、この点において、日本を盟主とする大東亜共栄圏の理念と合致するものであった。

第二回大会を目前に控え、『朝日新聞』の学芸欄には各方面から提言が寄せられた。例えば、文報審査部長の河上徹太郎は、「真の国民外交／大東亜文学者大会を前にして」（1943年８月10日付朝刊）と題した一文を寄せている。河上は、前年の第一回大会について「去年は大東亜精神とか、共栄圏文化とかいつても、それは日本側の理想であつて、先方の頭の中にそんなものが成り立つてゐるのか、どうか」という不安があったものの、「蓋を明けて見ると我々の憶測は杞憂であつた。先方の決意には、共通の理想を目指して揺がぬものがあつた」と記し、その成果を全面的に高く評価した。また、大政翼賛会文化部長の高橋健二は「思想的完遂へ／決戦文学者大会の意義」（1943年8月18日付朝刊）において、「武力戦に表裏する文化戦がいつも武力戦の後からついて行くことに甘んじてはならない。時としては文化戦が武力戦の一歩先を切り拓いて行かねばならない。また米英の思想謀略を防衛するといふ消極的態度に止まらず、これを圧倒する気概と智謀がなければならない」と述べ、文学者に対して文化戦を勝ち抜くためのさらなる奮起を促した。こうした国策組織の中枢に位置する知識人の言説と比較すると、奥野の文章は第一回大会の問題点を冷静に見つめ直し、第二回大会に向けて有意義な提言を行っていると言える。

一方、奥野のほかにも、第一回大会の問題点を鋭く指摘した人物がいる。佐藤春夫である。佐藤は戦時中、数多くの「愛国詩」や「戦争詩」を発表していたが、『朝日新聞』学芸欄の「満堂の清風を／大東亜文学者決戦大会に切望す」（1943年8月7日付朝刊）においては、自画自賛に終始する大会関係者の姿勢を、歯に衣着せぬ筆致で批判した。佐藤はまず、「昨秋の大会には自分は約の必ず果すべきものがあつて旅行し当時の模様は一切知らぬが、事後当事者は異口同音に大成功と報告してゐたにかゝはらず、沙上の偶語は大陸の文人たちの不平といふ

ものを伝へた。先方で不平を嚙み殺してゐたのを当方で大成功と思つてゐたのは、先方の社交上手を真に受けたところに我々日本人の好もしいお人の好さがあるとでも申すべきであらう」と記し、関係者の楽観的な現状認識に冷や水を浴びせている。さらに、自身が耳にした中国側の不満として、「一たいがあまりに形式的で大東亜文学者大会は大東亜の文化人が相互に胸襟を開いて東洋復興を語るための会合としては慊焉たるもので、むしろ我々を錬成するために召集したかの観があつた。現代日本の文学者は思ひの外お役人風であつた」という「誰やらの感想」を引き、「婉曲な表現の言外の意を、傾聴反省してみる値はないであらうか」と述べ、主催側の官僚的な態度を厳しく批判した。

佐藤に第一回大会に参加した中国人文学者たちの不満を伝えた人物が誰であるかは不明だが、それが奥野であった可能性も考えられよう。奥野は、佐藤が1929年に訳詩集『車塵集』を刊行した際に序文を寄せるなど、佐藤とは以前から親しい間柄にあった。また、奥野は1925年から43年まで文化学院の教壇に立っていたが、佐藤もまた1936年から43年まで、同学院の文学部長を務めており、両者は職務上でも接点を持っていた。佐藤と同じ『朝日新聞』学芸欄に掲載された奥野の文章は、佐藤のような痛烈な批判こそ避けたものの、第一回大会が議論倒れになる傾きがあったことを問題視し、さらには「隔意なき意見の交換といふことは言ふにやすくして行ふに難い」という感慨を吐露しており、ここからは、佐藤の認識と通底する大会運営への不満と批判が読み取れる。

おわりに

筆者は2018年、前述した奥野の北京留学に関する論文を執筆した際、奥野が存命中に出版した著書22冊、および没後に須田正一が著書未収録の文章を編纂した随筆集7冊には目を通したが、筆者自身による新たな未収録文献の調査までには至っていなかった。その後、奥野の著書や須田正一編纂の随筆集にも収められていない文章がまだ相当数存在することに気づき、調査を進めた。その過程で、奥野が大東亜文学者大会をはじめとする文報の諸活動に関与していた実態が明らかになった。1942年5月の文報結成に際し、奥野は外国文学部会幹事となった。同年11月の第一回大会では、準備委員として華北代表の人選に携わったほか、大会委員として会議にも臨席している。1943年4月の文学報国大会では、発

言の機会こそなかったものの、事前に発言要旨「大東亜の文学交流について」を提出した。同年8月の第二回大会では大会委員に名を連ね、訪中と時期が重なったため大会には出席しなかったものの、『朝日新聞』に「真の文化提携へ／大東亜文学者大会に望む」と題する一文を寄せている。このほか、南方共栄圏向けの日本文学史編纂や海外向け日本文学作品の選定にも関与していた。このように奥野は、文報の職務を次々と引き受け、精力的に活動を展開した。当時の言動を俯瞰すると、体制側に完全に取り込まれたり、過度に阿ったりはしていないものの、その枠組みから大きく逸脱することもなかった。それゆえに、多くの公的な役割を委ねられたものと考えられる。

本稿では、第二回大会開催までの時期を対象に考察を進めた。奥野はその後、1944年4月の文報組織改編に伴い、外国文学部会幹事長に就任している。さらに、同年11月に南京で開催された第三回大東亜文学者大会には、大会議員の資格で参加した。このような第二回大会終了後から敗戦に至るまでの奥野の動向については、稿を改めて論じることとしたい。あわせて、戦後の奥野が、戦時中に文報の諸活動を通して国策に協力したという自らの過去にどのように向き合ったのか、その点についても考察を試みる予定である。

註

1 奥野信太郎「年譜」『現代知性全集（7）奥野信太郎集』日本書房、1958年、281頁。

2 藤田祐賢「年譜」村松暎ほか編『奥野信太郎回想集』慶應義塾三田文学ライブラリー、1971年、412頁。

3 同上、412–413頁。

4 以下、本稿における資料引用に際しては、旧字体は新字体に、くの字点は仮名に改め、ルビは省略した。また、満洲、満洲国は歴史的用語として原表記のままとした。

5 『昭和十八年度 会員名簿』日本文学報国会、1943年、62–69頁。

6 中野好夫「9 外国文学部会」日本文学報国会編『文芸年鑑 二六〇三年版』桃蹊書房、1943年、16頁。

7 中村光夫『文学回想：憂しと見し世』筑摩書房、1974年、101頁。

8 「文化建設へ大行進／雄渾多彩なる八大企画／戦時の秋に捧げる文報の催し」『日本学芸新聞』1942年8月1日付。本稿で引用する『日本学芸新聞』はすべて『復刻版日本学芸新聞』（不二出版、1986年）による。以下、同紙の記事は発行年月日のみを示す。

9 金子光晴『自伝』平凡社、1957年、204頁。
10 櫻本富雄『日本文学報国会：大東亜戦争下の文学者たち』青木書店、1995年、158–159頁。
11 「文化建設へ大行進／雄渾多彩なる八大企画／戦時の秋に捧げる文報の催し」『日本学芸新聞』1942年8月1日付。
12 尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」『旧植民地文学の研究』勁草書房、1971年、30–31頁。
13 「芸術と信愛の大交歓／“大東亜文学者会議”今秋開催」『日本学芸新聞』1942年9月1日付。
14 「大東亜“文芸復興”の秋／満・支へ招待状発送」『日本学芸新聞』1942年10月1日付。
15 「大会議員」『日本学芸新聞』1942年11月1日付。
16 「大東亜“文芸復興”／十一月共栄圏代表を招待」『読売報知』1942年9月3日付夕刊。
17 竹内好「大東亜文学者大会について」『中国文学』第89号、1942年11月、265–266頁。
18 一戸務「大東亜文化の建設」『支那語雑誌』第2巻第12号、1942年12月、7頁。
19 中華日報社編纂室編『大東亜文学者大会』中華日報社、1944年、3頁。
20 柳雨生「異国心影録」『古今』第19期、1943年3月16日、86頁。
21 柳雨生「女画録」『風雨談』第6期、1943年10月、158頁。
22 「大会日程」『日本学芸新聞』1942年11月1日付。
23 「四月八日文学報国大会於軍人会館」『日本学芸新聞』1943年4月1日付。
24 「文学報国大会の発言／全会員に告ぐ」『日本学芸新聞』1943年3月15日付。
25 「文学報国大会発言通告表」『日本学芸新聞』1943年5月1日付。
26 「熾んな日本研究熱に応へて／南方へ新編日本文学史／国、外両部会の共同事業」『日本学芸新聞』1943年5月1日付。
27 日本文学報国会「序」日本文学報国会編『標準日本文学史（日本語版）』大東亜出版、1944年、1頁。
28 「海外へ“日本の姿”／枢軸、中立国に文学の贈物」『朝日新聞』1943年5月27日付夕刊。
29 「本会報告」『国際文化』第27号、1943年9月、94頁。
30 「泰、仏印からも参加／十月の文学者大会日程決る」『朝日新聞』1943年4月1日付朝刊。
31 「第二回大東亜文学者大会」『日本学芸新聞』1943年7月1日付。
32 高見順『高見順日記』第二巻之下、勁草書房、1966年、589–590頁。
33 同上、590頁。
34 奥野信太郎、前掲「年譜」、282頁。
35 奥野信太郎「北京の都城精神」『現地報告』第9巻第12号、1941年12月、54頁。
36 奥野信太郎「日本文学に通暁」『読売報知』1942年10月30日付朝刊。
37 「北京の古本市から／円明園の“形見”／痛憤新た暴英の悪業」『朝日新聞』1943年

10月6日付朝刊。

38 芳賀日出男「「随筆北京」の著者」『芸能』第10巻第2号、1968年2月、21頁。

39 「作家巴金ならびに郁達夫等は最近和平陣営に投じきたつた」という誤情報をもたらしたのは、文化使節として1943年3月末から5月末まで中国各地を遍歴した河上徹太郎である。河上は、「中国文学界に逞しき黎明／語る河上徹太郎氏／重慶から“闘将”還る／本然の心に打つ文化開拓の鐘」（『朝日新聞』1943年6月12日付夕刊）の中で、同様の内容を述べている。